



あけましておめでとうございます。



2025 年が始まりました。21 世紀になって早四半世紀が過ぎようとしています。世の中全体が変化していく中で変わらず不変のものと変わっていかなくてはならないものがあります。また、不変のものの中にも新たな発見があります。皆さんの生活の中に根付いているかけ算九九の答えを全部足したらいくつになるか計算したことがありますか？答えは 2025 です。今年の年号です。それでは九九の平均はいくつになるでしょう？かけ算九九の計算の答えは全部で 81 個あるので、 $2025 \div 81 = 25$ で 25 なのですが、25 は九九の表の真ん中にあります。九九の表の数字は全部等差で均一に並んでいるので、真ん中の数字の 25 が平均になります。今年の年号と常日頃生活の中で使っているかけ算九九の関係に思わずわくわくしてしまいます。

このようなわくわくする学びの発見を子どもたちと一緒に実感していきたいものです。

(今年の年号とかけ算九九の関係については、福島民報の 1 月 10 日付のコラム「圏外のアンテナ」にコピーライターの吉田有理氏（須賀川市出身）が執筆しています。)

適応指導教室「すこやか教室」について No2

「すこやか教室」には、現在、多くの児童生徒が登録されています。その中には、見学のみの児童生徒もいますが、毎日 10 数名の子どもが通級しています。多様な価値を認めながら、自立できるように支援しています。

かつては、通級する子どもは中学生がほとんどでしたが、最近は、小学生の通級者が増えています。体力をもてあます小学生もおり、大会議室で卓球をしたり、近くの公園に遊びに行ったりしています。またカードゲームで子ども同士が交流を図ったりもしています。UNO などのゲームは、何気ない会話ができるので、人間関係を構築するにも効果的だと言われています。小学生や中学生関係なく、カードゲームを夢中になってやっています。また「すこやか教室」では以下のような取り組みも行われています。

- 1 タブレットを使ったオンライン授業の実施
- 2 ALT や理科教師による学習指導、テスト等の実施
- 3 スポーツ教室や体験活動、工作活動等の実施
- 4 学校や放課後等ディサービス、病院等との連携
- 5 保護者との個別的教育相談会の実施



「すこやか教室」は、平日の午前中ならばいつでも見学ができます。

保護者の方のみでもかまいません。見学を希望する方は、学校または教育研修センターにご相談ください。

<須賀川市教育研修センター・教育支援センター>

住所：須賀川市大町 172 連絡先：0248-72-7185、7186

就学指導とインクルージョン

昨年度から就学2年前のお子さんを持つ保護者を対象に、就学説明会を開催しています。インクルージョンの流れとともに就学指導の考え方も変化してきました。

障がいのあるお子さんが地域の学校で学ぶか、特別支援学校で学ぶかの判断は学校教育法施行令第22条の3に示されている視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者、病弱者の障がいの程度を基準として判断されます。学校教育法施行令の一部改正（文科省 2013 年）により、特別支援学校に該当する障がいのある子どもも地域の学校で学ぶことを原則とし、市町村教育委員会が総合的な観点から判断し、特別支援学校に就学させることが適当であると認める者を「**認定特別支援学校就学者**」としました。このように障がいのある子どもは原則地域の学校で学ぶということを基本理念として、就学指導を丁寧に進めていく必要があります。



「すこやか教室」の「学び」 《コラム No.17》

3学期始業式の翌日、センター2F「すこやか教室」をそっとのぞいてみました。心地よい静けさの中、小学生も中学生も集中して学びにとり組んでいます。彼ら自身の「学び」と「学びの場」がそこにありました。昨日は、おだやかな笑顔と凛とした姿で始業式に大勢出席した児童生徒たち。今日からまた学ぶんだ、という気持ちを漂わせていました。

ふと私は、何度も訪れた適応指導教室を思い出しました。当時、全国でトップの復帰率をあげ、その秘密を学ぶために通った本庄市適応指導教室。後に本庄市教育長となる茂木氏が、教室の責任者でした。茂木氏は、子どもたちを「学校のハイテンションさについて行けない子どもたち」だと言います。学校や教室で自分自身を失う子どもたち。

教室の始まりはドラマチックでした。開設された最初の子どもたちは、隣接する体育館で大人のスタッフや大学生のボランティアととことん遊びました。勉強のことも学校のことも、何か自分自身以外のものになることもない数週間の後、スタッフがそろそろ勉強(学び)をと考え始めたある日、体育館から帰って来ると、和室に子どもたち全員が正座して「わたしたち今日から勉強します。教えてください」と言うのだそうです。・・・卵から雛が孵るその時「啐啄同時」という言葉の通り、親が殻を外から破る瞬間と子どもが中から破る瞬間が同時になる・・・このことは「心理的安全性」=自分が受け入れてもらえたことの結果でしょう。

始まった学び(勉強)は、基本的には「すこやか」と同じように自分で勉強したり、スタッフや大学生ボランティアに助力されたり・・・ですが、茂木先生自身の「授業」は一風変わっていました。

スズメバチの巣(もちろん空)を教室の真ん中に虫眼鏡やナイフや様々な道具とともに置き、何をしてもいい、壊してもいい、好きなだけ好きなように心ゆくまでこれに触れて観察し、気づいたことをどんどん書いていきなさい・・・→ 実物(「もの」との主体的な対話。あるときは茂木先生が静かにゆっくり朗読する詩を聴きながら、それを文字にしていく・・・心に沁みこんでいく「詩の聴写」。

文字通り「真正の学び」です。それ故「学ぶ」感覚をとりもどす(あるいは出会う)子どもたち。それは、自分自身をとりもどすことでもありました。自分自身をとりもどし、学ぶことを知った子どもたちはもう大丈夫です。学校に行っても、もう大丈夫。佐藤学さんの言う「学ぶ子はくずれない」・・・まさにそうなのですが、学校に行ってももう大丈夫・・・という言い方は不思議な気がします。もともとは学校でこのような心理的安全性、自分自身であること、真正の学び、他者とのつながりが実現していることが先ではないのか・・・。

足繁く学校と教室を往復し、学校の通信や資料を掲示し学校と常につなげる茂木さんとスタッフの尽力もありました。2Fの「すこやか教室」の子どもたちとスタッフのみなさまを見て、本庄と同じ何かを感じた今日でした。